座談会・技術書が生まれるまで

より良き情報源としての出版活動を

司　会　最近は出版活動が大変隆盛でして，土木工学の学術書に限りましても第二次大戦前と比較すると，非常にたくさんの本が出ています．それが学術界隆盛のしるしであればよいことかもしれませんが，読者の側に立ちますと，これでは良書を選ぶのが容易ではないわけです．

そこで，「よい本とはどういうものか」，「良書を出すには，どういう努力をしたらいいか」，あるいは「よい本が本当は出るはずなのに案外出なくなっているとすれば，それはどのような理由によるものなのか」，などについて話し合いたいと思います．

最初に成岡先生．ご体験も豊富なところでいかがでしょう．確かに最近土木関係の本もたくさん出ているのですが，たくさん出るということは，結局乱発してかえって良書誕生を妨げているのか，あるいはへたな鉄砲も数打ちゃあたるで，中にはいい本も出ると考えていいのかどうか．最近の，5年とか10年の，土木の出版状況を見てどうでしょうか？

好書を編むために

成　岡　私が，共著書として最初に出版したのは，『構造力学』第1巻（丸善）です．新制第1回生の昭和26年での構造力学の授業に間に合わすということで，昭和25年の7月に執筆をはじめました．昭和26年9月に出版されておりますから，出版されるまでが1年強です．私自身の原稿執筆はわずか3か月ですが……(笑)．5.5年にわたる軍務から帰ってきて，あまり勉強しないままに，昔の大藤・近藤共著『構造強弱学』（丸善）に代わる本をというわけで，いきなり相当なページ数を書きまして，あまりよいできばえではありません．戦後に教科書的な構造力学の著書が出版されたのは，これが最も早いと思います．その後，各出版社がいわゆる基礎科目のものは一通りそろえたいということで，多くの方々が次々と出版されました．そうすると，構造力学のような基礎的な科目では特徴のある本というのは，なかなか書きにくいのでございます．あまり難しいことを書いたらそっぽを向かれます．勝手な放言を許していただきますと，屋上屋を架すとまでは言いませんが，そんなにしてまで出版する必要はないというような本もなきにしもあらずですね．

本を書こうと思ったら，いろいろな文献（著書・論文）を常に見ておりまして，書物に取り入れるのに適当であると思うようなことがありましたら，勉強して，すぐに原稿用紙に書きとめておく，メモをたくさんつくる，というようにするとよいですね．やはり，相当な年数をかけて，常に努力しているということでなければいけないと思います．

また，われわれの書くものは日本人しか読めませんので，格別の苦心を払わないのが普通でしょうが，英語と

かドイツ語，フランス語などで書かれた書物ですと，各国の研究者・技術者が見ます．成岡・浜田共訳の『固体の力学人門』（培風館，1975 年）の著者は，Univ. of Calif., Berkeley の土木工学科の E.P. Popov 教授ですが，序文を読むと，要するに，ずいぶん努力して書きあげた原稿を同僚・友人 24 人に回して読んでもらって推敲を重ねておりますね．日本では，そういうことをあまりしないでしょう．活字になって残るものですから，Popov 教授のように，もう少し努力するべきであろうと思います．

司　会　伺ったところでは，良書を書くためには，あたり前のことかもしれませんが，たくさん本を読んでおけということですね……．

成　岡　聖徳太子の〈1 を聞いて 10 を知る〉ではありませんが，1 つ書こうと思ったら，やはり 10 ぐらい内外の良書を読んで勉強しておくことが必要でしょう．特に，教科書を書く場合には，英・米・独・仏の代表的な教科書を読んでかかるべきでしょう．向こうの教科書には出ておりますが，日本には全く見あたらないということが，たまたまあるわけです．そういうことが取り入れられるように，日ごろから努力しなければならないと思います．

類書が世に出る事情

司　会　成岡先生のいわれるように，原稿ができ上がったら同僚に見てもらうくらいの配慮が必要でしょうが，日本では，それはきわめて例外と思います．執筆者は，大体編集者から催促されるものですから，でき上がるとすぐ渡さないと悪いような状況に陥ることが多いでしょうね．

野村さんに編集者のお立場からお伺いします．そういう推敲を著者にお願いしていたら，いつになって原稿が完成するかわからないし，昔より出版競争が激しいという事情もあるでしょう．さしあたり執筆者への注文も含めて，お伺いします．

野　村　昔のことを，いろいろ古い人たちに聞きますと，割合のんびりしておった感じがいたします．昔というのは戦争前の時点ですが……．

司　会　大学教授も昔のほうが時間的余裕があったようですが（笑）．

野　村　いまは出版社の数も増えましたし，また，各出版社がそれぞれ基本的なタイトルのもの，いわゆるシリーズものを揃えようという考え方もございます．お願いする先生方がどうしてもある程度集中して重複するということになると，今度はいついつまでというお約束をしても，そのとおり原稿を入手できるということのほうが，ごくごく珍しいこととなります．その辺のところが出版社として頭が痛いわけです．

私どもも営利会社でございますので，ある一定の売り上げを確保するということになると，では「このくらいのものをこのくらいの時期に何部くらい出して，こうすればこうなるのじゃないか」という計算をしているわけですが，このような計算の立てようがないというのが現状なんですね．編集関係の人間だけを考えますと，ご存知のように大体重版というのは一般にあまり手がかかりません．しかし，新刊を出すために非常に多くの人手がかかっておるということですね．ですから，先生方がお約束を守って下さらず，人手を遊ばしてしまうということになりますと，これは大変なことになります．それがこわいので，どうしても無理矢理に原稿をお願いしてしまうことになります．

【出席者】（五十音順）



内海庸介氏
（株）鹿島出版会常務取締役営業部長



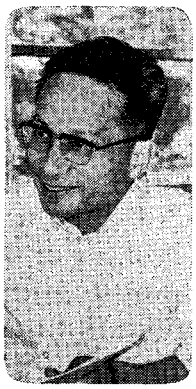
塚山隆一氏
日本セメント（株）研究所主任研究員
（前・書評小委員長）



成岡昌夫氏
名古屋大学教授 工学部土木工学科



野村保恵氏
丸善（株）出版部第三・製作課長



司会・高橋　裕
会誌編集委員長

確かに競争が激しいということもあります．よく言われる〈柳の下にドジョウが何匹〉という考え方もございますし，先ほどのお話のように，〈どうしても，あるタイトルのもの，シリーズ物をひととおり揃えたい〉ということになりますと，どこそこの本と対抗することのできるものをどうしてもここで出したい，ということもあります．教科書の出版・販売ということを考えてみましても1冊か2冊しか出していない分野のものを売り込むよりも，やはりいろいろな種類の本を揃えて先生方にお願いするほうが容易であるわけでございます．また，そのほうが費用もペイすることになります．

司　会　本が読者の手もとに届くまでの流通機構とその問題点を，内海さんから，ご説明下さい．

広告には出たが本がない

内　海　それでは，簡単にまとめてご説明申し上げます．まず第一に，ここでは土木を中心に出版している工学書出版社が，出版業全体の中でどのような位置づけをされているかということは大きい問題でございます．こちらの学会誌のように直接読者に行くような場合は，一つの直販形式といえますが，一般の出版社のとっている方法というのは，出版社で本にされたものを取次会社にもっていくわけですね．取次店は東京出版販売（東販）と日本出版販売（日販），この2社が一番大きいのですが，この2社をはじめ60社ぐらいあると思いますが，——本はこの取次店を通じて，それぞれの系列書店に送られるわけでございます．この小売店，すなわち，実際お店をもって販売しているのが全国で2万店くらいと見て間違いないと思います．その中で，工学書を取り扱っている書店は，多く見込んで600ぐらいと見たほうがいいのではないか．この600という数字は全体から見ると非常に少ない数字でございますね．この600の書店から読者に本が届くわけでございますけれども，出版社側からみて一番困るのは，一定期間内書棚に陳列されたのち，販売されずに書店から回れ右して出版社に戻ってくるいわゆる“返品”があることです．委託配本である以上多くのメリットもありますが，他方この返本問題が現在大きな課題で，刊行部数，定価から経営に至るまでの大きな圧迫要因となっております．例えば定価のつけ方をお話しますと，工学書ですと，大体初版は2000から3000部，ものによっては1000部というのもございます．読者層を工業高校の生徒とか大学生，そういうふうにはっきり設定して定価をつけるときは，まず定価のほうを決めて，これなら買えるだろう，例えば2000円ということになりますと，逆算して，版型とか原稿枚数とか出版時期とかを決める．つまり，主たる読者層にマッチした定価づけをするわけです（プライスライン方式あるいはマークアップ方式）．これに対してとにかく原稿をいただいて，割付けして，出版社の適正利益をのせて定価を決める場合でも，他社発行の類書の定価も無視できない現況です．そこで，出版物の販売で一番問題が大きいのは，こうしてつくった本を取次店に流す場合，買切扱いならともかく，委託の場合2000部のうち5割から6割くらいをまず見本送本として送るわけですが，最近の返品事情，いわゆる売れないで出版社に戻ってくる本は平均で大体35～36%ぐらいあるのじゃないでしょうか．これは工学書も例外ではございません．

従来の出版は創立者の出版理念の実現のためとか一つの理想像がありましたから，「文化に寄与するためにいいものをつくるんだ」ということでとおってきたわけですが，最近は高度成長でだんだんと出版産業とか企業意識が高まるにつれて，文化性と同時に営利性と言いますか，企業の利益というものを無視できないようになって参りました．いくらいい本であっても，また，内容がいいと言われても，売れない本は書店がすぐ返品してしまうわけです．これが痛い点です．

『出版年鑑』により，土木工学図書のリストを見ますと，昨年ですが，新刊として記載されているのが年間で253点あります．ところが全体の新刊書というのは2万点以上もあり，1日大体60冊から80冊出ているわけです．これが取次から同じパイプで書店へ送られている現状です．月末になると，売れても売れなくても書店に請求書が行くわけですね．そうすると本屋さんは，まず本で返品しておけば非常に支払いが楽になる．三，四日置いてあまり売れないとなると，ぱっと返品してしまう．これが委託制度の問題点でございます．

出版界が委託制度によって伸びてきたということもございまして，日本の書店は先ほども申しましたように2万からありますが，その80%は30坪以下であり，雑誌，文庫，新書，一般書でいっぱいで，とても専門書をおくスペースはありません．

ご存知のように，これらの小売店は本の揃え方に特徴のある店は少ないわけですが，最近は丸善，紀伊国屋書店とかその他の大型店舗もどんどんできました．工学書の揃え方も充実してきておりまして，非常に地域読者にとってはサービスになっております．ところが工学書を取り扱う書店の分布が大都市に偏っておりますために，地方に行くと「広告は見たが店頭にはない」ということで，読みたい本が店頭になく，だんだんと欲求不満がこうじてくる．そのため工学書出版社が協力して，建築，土木図書を揃えている書店で工学書の展示即売会を各地でやってきたわけです．そういう機会にいっぺん全部揃えて，その中からお客様に選んでいただこうという趣旨

で，かなりの成果をあげています．

一般書店ですと，5千，1万あるいは5万部刷りまして，ぱっと広告してお客が集まったところで網を打つ．つまり〈漁業型〉といってよいと思います．ところが工学書のような専門書というのは，年々読者数を増やして培養していく．それを書店に結びつけるのだから，しいていえば〈農業型〉といってもよいのじゃないか．つまり，工学書出版社の場合，ベストセラーをねらうのではなくて，毎年重版していくというロングセラー型をねらうといっても過言ではないと思います．

さあっ！と眺めても良書はわかる

司　会　塚山さん，読者の立場から，特に学会誌編集委員会書評小委員長のご経験に立って，最近の土木関係の学術書について読む側からのご注文をお願いします．

塚　山　そうですね，私は書評小委員会に関係していたものですから，非常にたくさんの本をさっさと見るという習慣がついているみたいに思います．時間的な制約もあることから，委員会の席上ではとてもゆっくり本を読んだうえでランクづけをするというような暇はないんですが，しかし不思議なもので，さあっと見るとピンとくるものがある．

司　会　読書体験を積むと，ざっと眺めていると見当がつくというわけですね．

塚　山　そういう感じがいたしますね．それと，自分自身の経験からいって，どういう本がいい本だろうかということになると，結局一つには繰り返し繰り返しその本を見る必要が生じてくるというような本がやはり….

司　会　何回も繰り返して読みたくなる本が良書ということですか？

塚　山　読みたくなるというか，読む必要が生じるということですね．中味を覚えていなくても，そこに出ているということが頭に残っている本は当然いい本ですし，しょっちゅうそこを見なければならなくなる．こういう本はやはり数は非常に少ないと思います．

それから，どういう本が欲しいのか．これは読者のほうも自分勝手だと思いますが，結局，いま必要な問題がズバリ出ている本があれば一番ありがたいわけです．ところがそういう本はまずない．これは，例えば学生さんと実務に携わっているわれわれとでは違うわけですけれども，われわれの場合，非常に忙しくて，本を最初から終わりまで読んでいる暇というのは，まず残念ながらない．そこで，どうしても切張り的な読み方が多くなるわけです．

司　会　逆に，切張り的な読み方に耐える本が大事ということになりますか．また，何回もひもとくことができる本が欲しいということですね．

塚　山　それは本ばかりでなくて，むしろ文献類が役立つことも非常に多いわけですけれども，ただそういう読み方をする場合にも，やはりがっちりした良書をその前に十分に読んだ体験があって，はじめて切張りができるわけですから，逆にそういう類の良書が，われわれの立場からいうといい本ではないのでしょうか．大変抽象的なんですけれども…….

司　会　優れた本は一見してある程度わかるということでしたが…….

塚　山　これは誤解があるといけないのですが（笑），大変おこがましい言い方でして……，もちろん読むべきものはじっくり読み，いろいろな専門分野の方が揃った書評委員のあいだで舌戦をかわしたうえで書評もしておるわけなんですが，なんというか，本を開けてさあっと見ていくときの第一印象みたいなものですね，何かそういうものが，かなりの決定力をもちますね．

成　岡　著者の苦心がにじみ出ておる，全部にわたってではなくとも，どこか見たら，苦心のあとがわかると言うような…….

司　会　読者も目が肥えていれば，それが本当に著者の努力でできたかどうかわかるはずですね…….

塚　山　と思います．最初に成岡先生がおっしゃられたように，1つ書くのに10読まれたというような…….

成　岡　いや，読んでないですよ．読むべきであるということです（笑）．

司　会　血のにじむ努力というか，著者が本を書くときに特にどこに気をつけなければいけないかという点があるのでしょうね．

著者の情熱は必ず伝わる

成　岡　直接的な答になっておりませんし，また，私自身の経験だけで申しわけないのですが，『構造力学要論』（丸善，1974年）という，とてつもない本を出版しました．これはまず売れないであろうし，また，売れるはずがないと思いました．いままでの普通の構造力学の教科書には書いてないというようなことを，今日私が書いておかなかったら，将来だれも書けないであろう，そういう自負と自信をもって，1972年の1月1日の正午から書き始めました．1972年1月1日～2月16日の36日間にわたる琉球大学への出張中も，琉大の他の先生方よりも早く出勤・おそく退出して，琉大図書館の土木工学の本を片っ端から引っ張り出してきて読むような努力をし，かなり苦労もいたしました．しかし，これは予想外に多く買っていただきました．ですから，この経験からして，著者が本当に苦労した本は，その努力が報いら

れると思います．私はそのよい経験をいたしました．

司　会　先ほど内海さんは，流通面から見ても，工学書はロングセラーをねらうべきであるといわれました．成岡先生のお話にも，次々と新しい学生が読むに耐える息の長い本が大事であるという趣旨であったと思うのですね．そこでどうなんでしょうか．いまの流通機構は，そういうロングセラーを育てるには必ずしもマッチしていない面もあるかと思えますが…….

定評のある本を見てから買う

内　海　最近の傾向をみましても，学生諸君でも，本を買うのにいくら本の洪水だといわれてもそれに溺れるようなことはないですね．手ごたえのある本を買うという点では，いま成岡先生がおっしゃったような，著者のほうでの血のにじむような努力のあとがはっきりわかる本ということと表裏になると私は思うのです．

それからもうひとつは，定評のある本を買うという傾向があるのではないでしょうか．それに，これは日本人の習性といってもいいのか，現物を見て買う傾向が強いですね．

司　会　それはありますね．新聞広告だけではなくて，やはり実物を目で見てから買う傾向が強いですね．

内　海　私のところでもよそさんでも，みんな愛読者カードというのを入れておりますが，それを見ますと，現物を見て買うというのが一番多いんですね．それが，先ほども申しましたように，なかなか書店に置いてもらえないわけですから，これが一番頭の痛いところです．

発行後1年たちますと，委託から常備寄託という形に変えて，特定の工学書をよく揃えている書店を選んで，見本として1冊ずつひとわたりお預けするようになる．売れればその分を常に補充しておくようになる．この常備図書を整備・充実させている書店は，読者にとってはありがたいわけです．

すると，先ほどに戻りまして，例えば書店，取次のマージンは 30% と見たらよろしいと思うのです．1000円の本は 700 円で卸すわけですね．700 円のうちに，印刷代と製本代と紙代，この直接生産費といっているのが 35% ぐらいはあると思うのです．これに印税などが平均10% 加わるとしますと，700 円のうち 250 円が残る．つまり，25% の利益なんですけれども，宣伝費がさらに 10%，人件費その他の諸がかりが 10% と見ますと，とてもじゃない．初年度で 2000 つくったものを 1200 冊配本して，返品が 30% あれば，10% の宣伝費で半分売れても，入金額に対して 20% 以上の負担になるわけですね．そういうことを，注文品や在庫販売の動きでカバーしながら，どちらさんでもどうにかおやりになっている，これが実情です．

ですから，例えば売れても売れなくても，内容がいいし，後世に残す本だという場合には，500 部でもいいから公共図書館とか大学図書館とか，購入してくれるところが決まっていると，非常に安くできるわけです．そういうようになれば，非常に優れた，後世に残すべき本も安心して出せるのです．そういうことがない限りは，売行き，売上げだけでいきますと，出版物が質的に向上するかどうかということには，これは恐らく今後に疑問があります．

司　会　野村さん，ロングセラーについて編集のお立場から一言…….

風雪に耐える本を出す

野　村　それぞれの出版社で会社のねらっている方向というのは当然あるわけです．私どもの場合は，やはりロングセラー以外は出す意思はございません．少なくとも5年，10 年の風雪に耐える本でなければ出したくないですね．

司　会　10 年ぐらいが一応のめどですか？

野　村　理工学書というのは，大体，10 年くらいがひとつのサイクルでございますね．10 年たちますと，もうちょっと内容的に古くなってしまいます．売行きがそこらへんで確かにがくりと落ちます．

私どもの場合，とにかく新刊と重版の割合というのがいつも問題となっているわけですけれども，新刊というのはどうしても費用がかかる．ということになりますと重版である程度それを支えなければならない．だから，新刊が4割，重版が6割ぐらいの割合でつくっていきませんとペイしないということになります．

司　会　初版は収益面ではあまり期待できず，重版になって営利的にも引き合うという感じでしょうか？

野　村　大体そういうことになりましょうね。人件費まで計算して細かい数字を出してみたことがあるのですが，やはり初版は完全な赤字でございます．

どういう本が買われるか

司　会　初版だけでは，それを売り切っても赤字ですか？

野　村　はい．完全に売り切ってやっととんとんという感じがございます．どうしても必ず残りますから…….

内　海　野村さんのご意見かと思いますが，初版がなくなるまでの期間が昔は1年ぐらいだったのが，最近は1年半から2年ぐらいになっている，こういうところが多いのじゃないでしょうか．中には4年たってもまだ初

版が残って困っているんだ，という話もよく聞かされます．一番残念なのは，それがだれが見てもいい本の場合もあるわけですね．どうして売れないのだろうとわれわれも不思議で…….

塚　山　書評が悪い（笑）．

司　会　塚山さん，本を買うときに，新鮮味のある初版を買うか，版を重ねているものは評価も高いので安心して買うということですか？

塚　山　そういった安心感は確かにございますでしょうね．

司　会　しかし，新刊書は，新しい考え方や情報が入っているという面がありますが…….

塚　山　これは個人的な体験が主になりますけれども大体初版でこれだと思ったら買ってしまいますね．

司　会　先端を走っている学者，研究者はどうしてもそういうことになるでしょうね．学生はともかくとして…….

塚　山　もう少し一般的に考えますと，これはやはり口コミですとかいろいろのコミュニケーションで，「あれはいいぞ」，「あれを読んだら試験に受かったぞ」というというようなニュースが伝われば，そこから広がっていくということじゃないかと思いますけれど…….

司　会　読者は選ぶとき，どういう基準で判断しているんですかね．

塚　山　研究者の立場だけで言いますと，これは割合狭い範囲のことですから，自分である程度判断ができますね．日常，問題意識を持っていて，こういう情報が欲しいなと思っておったやつが出ているかいないかということは，パラパラめくってみただけで比較的簡単にわかります．

内　海　それとテーマに関心があるかどうかというようなこともあるんじゃないでしょうか．というのは，今の読者が何を求めているか．つまり読者需要は定評のある本に集まると同時に，現実の問題とからんで読者需要をよび起こすような内容をもった本が動いている．こういういろいろな要素が，書評に取り上げられたとか，人にすすめられたとか，買いやすい値段だとか，総合的に働くんじゃないでしょうか？

司　会　いままでは主として，学術書一般の話を伺いましたが，今度は土木の学術書に特有の問題についてお伺いします．成岡先生，いわゆる学問の先端をいく学術書の面で，ご専門の構造関係でも結構ですが，さしあたり日本の本に限るとしますと，土木でどんな本がよい本だったと思われますか？

成　岡　そうすると，"私の選んだ土木の名著"（笑）…．まず取り上げるべきは，林桂一先生のお書きになった，"K. Hayashi : Theorie des Trägers auf elastischer Unterlage und ihres Anwendung auf dem Tiefbau nebst einer Tafel des kreis-und Hyperbelfunktionen, Springer 1921" でしょう．これは京大に提出された学位論文（英文，明治 45 年 2 月 24 日），在外研究員としての研究，帰国後九大教授としての研究の成果をまとめて，ベルリンの Springer 社より出版したものです．出版されたのが 1921 年で，わが国ではだれも注目しませんでしたが，外国の著書では，しばしば引用されています．日本で注目されはじめましたのが 1960 年ごろですから，約 40 年たっておりまして，最近，Photo-copy 版が出ております．それから，鷹部屋福平先生が九大卒業後 3 年間の研究成果をまとめられて独文で書かれた学位論文（1922 年 10 月 13 日）が，"Zur Berechnung des beiderseits eingemauerten Trägers unter besonderer Berücksichtigung der Längskraft, Springer 1924" として出版されています．

Springer 社からは，ほかにも稲田隆先生（1930 年），井口鹿象先生（1933 年）の著書があります．また，英語で書かれたものには，広井勇先生がニューヨークで出版された 1888 年，1905 年のものがあります．われわれは，これらの先達の仕事を決して忘れてはいけないと思います．

司　会　いまおあげになりました，林桂一さんや鷹部屋さんの本を先生が名著と判断なさるのは，内容が，それこそ血のにじむ，自分のご研究に満ち満ちている本であって，孫引きみたいなものでないからですか？

成　岡　そう言えるでしょう．それから土木工学に関係ある分野で言いますと，妹沢克惟氏の『振動学』（上・下）（岩波書店，1949 年）ですね．妹沢克惟氏は東大の造船出身ですが，東大の震研・航研にも関係しておられた方です．この本は，振動に関することはすべてが網羅されており多くの文献があげられておりますが，「これらは絶対に孫引きではない．全部続んだのだ」ということをはっきり序文に書いてあります．それから，物部長穂さんの『水理学』です．この著書の自序には敬服いたします．若輩のとうてい及ぶところではありません．あとはそう簡単にはあげられませんね．

土木工学書の特長

司　会　野村さん，ここで土木の本の特徴を伺えれば幸いですが…….

野　村　私ども本をつくる立場から申しますと，土木の本は数式が非常に多くなる，それから図が非常に細かいものが多くなる，表も当然入る，その辺でコストが非常に高くなるのです．

内　海　野村さんのところなんかは，初校のゲラを原

稿の代わりにまた先生が手を入れて，真っ赤にされるというケースはどうですか？

野　村　最近は非常に少なくなりました．

司　会　著者もだいぶ心得てきたということですか？

野　村　それはいろいろな要素があると思うのです．だんだん世の中が忙しくなったということもあると思うのですが，それだけ推敲をされるということが……．

ゲラの段階で直しが多くなった場合，印刷所に組直し代をとられますと，これが全部原価の中に入って，本の値段がそれだけ高くなるわけです．昔はそういうような点は，出版社側が圧力をかけて「サービスだ，サービスだ」ということで，印刷所で組版などの仕事をしている人たちに無理じいしていたのです．それがひとつには，原稿をいただいたらできるだけ早く効率よく本にしないと，世の中に遅れてしまうという考えもございますし，そういう点から，原稿をできるだけきちっとしていただいて，後で手を入れないようにお願いしたいというようなことで，それがだんだんと浸透してきたのかもしれません．しかし，これは一概には言えませんが……．

司　会　内海さん，ご経験で土木の本の特長は……．

内　海　土木の学術書，土木の現場向きの本，学生の読む本など，その内容により違いますが，共通して買い控えの感が強いですね．逆にいえば，読者の選択が厳しいということです．新刊さえ出せばなんでも売れるという時代ではないですね．しかし，比較的20代，30代の方の購入層が多いということは，学生や現場の若い技術者が購読者の中心ということでしょうし，心強い傾向ではあります．

司　会　塚山さん，ご専門のコンクリートの分野ですと，建築分野から出たコンクリートの本もかなり必要でしょうか．土木のほうのコンクリートの文献を読み揃えていればほぼ足りるのですか？

塚　山　示方書とか指針とかはそれぞれの学会でお決めになっているから，別々に見ないといけないですが，コンクリートそのものについては共通な面が非常に多うございますから，どちらのお書きになったものでも，共通な本として読めると思います．ただ，コンクリートを使ってつくるものが違いますから，そういう違いはございますでしょうね．ですから，やはり土木は土木のコンクリートの本のほうが，直接的に役に立つということは言えるのではないでしょうか．

司　会　コンクリートに限らないのですけれども，外国で“シビルエンジニアリング”というときは，日本でいう建築の構造関係は入ります．本の場合も，欧米では土木と建築の構造は共通しているわけでしょう．日本ですと土木の構造の先生の書いたものと，建築の構造の先生の書いたものは，それぞれ別個に発達しています．

成　岡　構造力学を例にとりますと，対象も解析法も同じといっても，たわみ角法によるラーメンの解析まではいいのですけれども，それから後のラーメンの設計計算法とか略算法とかになりますと，建築独特ですね．そうすると，やはり建築の人には土木の人の書いた本が最後まで使えない．また，影響線という考え方は，土木にあって建築にはない．京都大学では，私の勤務していた昭和36年までは，ラーメンまでは昔から土木工学の先生が土木の学生と一緒に教えておったのですが，いまはどうなっておりますかね．名古屋大学では，全く別々です．土木出身の昔の構造力学担当の教授は偉かったということにつきましょう．もっとも，世の中が複雑になってはきましたが……．

司　会　それは構造力学だけでなくて，流体力学や水理学などもですね．

成　岡　日本では，機械，土木，船舶，それぞれ別々に教えていますね．イギリスの Cambridge 大学では，学部段階では学科の区別がありません．材料力学，構造力学，流体力学，熱力学，電磁気学はすべて必修で，MC に進学してから分かれます．

学問の世界に国境はないか

司　会　応用分野になると違うのだから，やはり別個でないと不便でしょうか……．先ほど林桂一先生のドイツ語の本の話が出ましたが，言い古された言葉ですが，学問の世界に国境はないわけです．そうなりますと，もっと気宇壮大に，日本の一流学者も，国際的に通用する言語で学術書を出すべきである，ということになりましょうか……．

成　岡　土木工学の分野で外国から本を出した方は，先に言ったように，ドイツ語で林（京大，明治36年），鷹部屋（九大，大正8年），稲田（九大，大正5年），井口（工部大学校，明治15年）の4人，英語では広井（札幌農学校，明治14年），合計5名だけであると思います．昔の土木の先生がいかに偉かったか……(笑)．

その意味で，やはりよく勉強して，まあ1冊ぐらいは外国の出版社から出すよう，目標を早くから立てて努力すべきであると私は思います．お前は非常に生意気なことを言いながら，ひとつも出版してないではないかとお叱りを受けそうですが，実は現在の2冊のもの（Springer 社，McGraw-Hill 社）より優れた伝達マトリックス法のことを書きたいと考えて，Springer, Wilhelm Ernst und Sohn, および Prentice-Hall の三社に目次を送って，出版を申し込んでみましたが，OK となりませんでした．現在は有限要素法一辺倒の時代で，これが終わらないと，他の解析法の出版は無理だ，ということのよう

で，いまは静観いたしております．しかし，有限要素法の文献集は，ニューヨークの Pergaman Press 社から出ることとなり契約が終わりました．

司　会　意気や壮…….

成　岡　やはり常日ごろ，monthly に刊行されている雑誌に国際会議，シンポジウムなどの Proc. だけでなく論文をちゃんと出しておく必要がありましょう．そしてやはり名前を売っておいてから出版するように…….

司　会　野村さん，日本の出版社が英語の本を出している例を聞いていますが，日本の出版社が英語で学術書を出すとか，外国の出版社と共同で出すとかする方向はどうなんでしょうか．今後，編集のお立場からは，容易でないのか，将来を考えればそういう方向にだんだん行くべきであるのか，どうでしょうか？

野　村　実務的なレベルでものを考えますと，翻訳の問題がまず致命的な問題になってしまうのです．いい英語とか，いいドイツ語とかいうのが，まず簡単でない．

もう一つは，そういう外国に対するサーキュレイトの問題ですね．これがまた，日本で出す場合は非常に難しい．

司　会　かなり困難ですか．10 年先とか 20 年先を考えても，容易ならざることでしょうか？

内　海　一番の問題は，日本では本さえつくれば委託配本ということが可能なんですが，海外ではそういうシステムはないわけですから，事前に注文をいただかないと貿易業者が扱いようがないわけです．

野　村　美術書のような場合は，ある程度そのものずばりで見られますので注文をとるのも割合なんとかなってしまう．工学関係の専門書の場合は，この点ちょっと難しゅうございますね．大体日本語で書いたものを見て評価してもらうということができませんからね．

内　海　そういう紹介の努力は，例えば国際文化交流会とかで，土木図書も含めて，日本の本を向うへ紹介したいとやっているのですが……．フランクフルトとかワシントンなんかのブックフェアに最近は日本の業者も行くのですけれども，顔ぶれを見ますと，野村さんの言われたように，やはり美術的なものとか，そういうものが多いようですね．

野　村　いわゆる宣伝費の問題ですが，こういう本が出るのだという，この周知徹底が実際問題としては費用の出どころがないわけです．ですから，土木なら土木のある部門について，1 点だけでなく，何点かを同時にサーキュレイトしませんとペイしないわけでございます．

良い本をつくりたい

司　会　最後にそれぞれのお立場から，今後の希望，提言などについてお伺いして閉じたいと思います．

内　海　いわゆる工学書の発行元は 600 軒ぐらいの書店で扱われていると先ほど申し上げましたけれども，書評などを読まれて，この本を注文したいという場合は，どこの本屋さんでもよろしいので，ご注文をいただければ取り寄せてもらえます．これはぜひともお願いしたいと思います．

それから書評も結構なんですが，すべてを書評するわけにもいきませんから，せめて『土木学会誌』に，これだけの土木書の新刊が出たという，ただ報告だけでもよろしいのです．そういうことをしていただくと，ずいぶん地域読者には親切じゃないかと思うのです．

野　村　本を注文されるときは，必ず，出版社の名前と著者の名前と書名と，この 3 つだけは最低限度お願いしたいと思うのです．書名だけですと調べようがないわけなんです．

それから，これはちょっと話は別になりますけれどもこれから先の本のつくり方という点で，ご存知のようにいまの印刷業界に優良な新規の労働力はほとんど入ってこないわけです．何年間いまの方法でやってゆけるか．10 年ぐらいまではなんとか大丈夫だと思いますけれども，その先については，いまなんとも言えない．特に組版の問題ですね．これをどうやって残していくかということが，出版社にとっても大変な問題であるし，また，その難しさについて著者の側からのご理解・ご協力が得られないと専門書の組版ができないということで，本ができなくなってしまうという危険があるわけです．

塚　山　やはり，読者の側からしますと，いい本が欲しいというのは，これは共通した問題だと思います．そのためには著者の負担を軽くしてあげて，時間をかけてじっくりお書きいただく本のつくり方がよろしいような気がしました．

もうひとつ，いままでお話に出ておりましたのは，土木の世界の中で書くあるいは読むという本だったかと思いますが，一般の方に土木の仕事というのはこういう仕事だというような PR をするのに役に立つような本は，これはわれわれ土木屋としてもあったらいいのではないかと思うのでございますが．ただ，そういうものを意識してつくれるかどうか．例えば，吉村昭さんの『高熱隧道』のようなものでございますね．

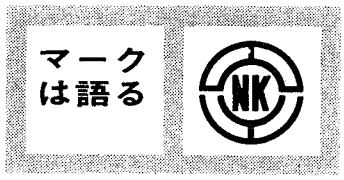
成　岡　司馬遼太郎氏は，小説を書くために入るであろう印税の半分以上を取材費に使うと聞いています．われわれも，それの何分の一かの努力をしなければいけないと思います．

次に，さきほど言いましたように，日本人が外国から本を出版しようとしてもなかなか難しいようですね．数学の方面は少し出ているようですが．しかし，先ほども

申し上げました文献集（bibliography）なら，翻訳の心配が不要ですから努力すれば十分できるはずですし，これなら世界中の研究者・技術者にサービスすることができます．大学の先生方は定年5年前ぐらいから，自分の専攻分野についてつくることをぜひお考えいただきたいと思います．たとえ出版されなくても，テープにしておきますと，コンピューターでIRできて，役立ちます．最後にもうひとつ，執筆者としてのモラルにふれたいと思います．出版者に対して執筆を約束した以上，まじめに執筆して期限までに渡すように，信義は守らなければなりません．私もある出版社の講座ものの編集委員をしていまして，執筆者が約束を守らないのにホトホト手をやきました．年頭と夏休みにちゃんと連絡しても，全くだめでした．これは出版社泣かせでしかありません．これでは大学内で通用していても，出版業界では前科ものです．もっと自戒してほしいと考えます．

司　会　ありがとうございました．今日伺ったご提案が，これからの土木の学術出版の発展に生かされることを希望します．

（文責・編集部
昭和51年7月31日，土木学会5号室にて収録）



日本工営株式会社

当社の社章は創業後まもなく生まれたが，これは現在の社章と同一のものではない．創業より昭和20年代にわたり，製品に商標として付する必要から社章は作られていた．その当時の社章は日本工営の日と工とを組み合せた円型の形で，現在の社章の中心のNKのないものであった．しかし，その後当社は昭和20年代後半より海外進出を始めたが，海外活動の経験から，現地の人びとにも日本工営をアピールする必要性を痛感し，社章の社内募集が行われた．その応募作品を参考に久保田豊会長の発案により，日本人以外にも当社のマークが理解できるように，それまでの円型の日工の中にさらに日本工営の頭文字NKを入れた社章が昭和30年4月1日に制定された．要するに国内と海外の活動を同時に象徴しようというわけである．これが現在使用されている社章である．

社章は，社員バッジ，社旗，当社の製品，車両，作業所における看板，作業服，その他当社発行の刊行物に使用されている．（山口正史・記）

土木工事の
施工途中の安定計算と実例

日本道路公団前技師長・理事　三野　定　建設省道路局高速国道課長　住友栄吉　編
B5判上製352頁・図表472点収録・定価4,800円・〒600円

本書の特長
■土木構造物を安全に施工するための施工途中の安定計算と実例を詳述したわが国最初の技術書
■本体工事と仮設工事全般の施工途中の安定計算法を確立
■どこの土木現場でも活用可能な実例を豊富に収録

目　次

第1編　本体工事
第1章　土構造物
1.1 軟弱地盤における検討法
1.2 設計方法
1.3 工事途中の観測結果からの安定の再検討
第2章　橋りょう下部構造
2.1 井筒の施工中の応力計算
2.1.1 安定計算
2.1.2 沈下の検討
2.1.3 側壁水平方向の検討
2.1.4 側壁鉛直方向の検討
2.1.5 刃口の検討
2.2 ケーソンの施工中の応力計算
2.3 シートパイルの締切の計算
2.3.1一重締切　2.3.2二重締切
第3章　橋りょう上部構造
3.1 ステージング工法
1.工法の説明　2.架設機材
3.問題点と安全性
4.荷重と許容応力および安全率
5.施工例・設計例・計算例
3.2 ケーブルエレクション工法
1.工法の説明
2.仮設備および架設用機材
3.安全施工上の着目点
4.荷重と安全率　5.計算例
3.3 PC桁の架設
1.PC桁の安全
2.各種許容応力度および安全度
3.横取りと引出し
4.ケーブルエレクション・その他
第4章　トンネル
4.1 問題点と総括
4.2 坑口施工
4.3 膨張性地質での施工
4.4 土かぶりが浅いところでのトンネル掘削
4.5 仮設備の環境対策
第2編　仮設工事
第1章　土留工
1.1 土留計画および施工過程で特に留意すべき点
1.2 土留工の設計
1.3 設計例
第2章　型わく・支保工
1.型わく　2.支保工　3.実施例
第3章　足　場
3.1足場の分類　3.2丸太足場
3.3 鋼管足場
3.4 計算実例
第4章　仮桟橋

1級土木施工管理技士実地試験問題の解き方
■昭和44年～50年までの全問題と解答を掲載　B6判・304頁・定価2,000円・〒500円

東京都新宿区新小川町
1－9－6　〒162
近代図書株式会社
電話03(268)8771～2
振替　東京4－23801